

## Smart Times

家ホールディングスは介護食事業に参入した。佐々木さんの父親は高齢になってから咀嚼（そしゃく）しにくくなり、具材を細かく刻んだ料理を食べるようになった。このシーンを「自分の親が食べ

「父親に大好きな牛丼を食べさせたい」。2015年9月、吉野家ホールディングスの企業内起業塾で商品開発部の佐々木透さんが、高齢者向け商品を社長に提案したことから、吉野

インターウォーズ社長

吉井 信隆



1979年リクルート（現リクルートホールディングス）入社。首都圏営業部長などを経て95年にインターウォーズ事業のインターウォーズを設立、社長に就く。日本ニュービジネス協議会連合会副会長。

れる形で、昔ながらの吉野家にとつて新たな事業領域を家の牛丼の味を提供できた切り開いたこの商品の開発から、多くの人に喜んでもらうの起点となったのは、論議するはず」と考え、介護食的な市場分析からのアプローチの挑戦を思い立った。商品開発は困難を極めた

カーとしての新規事業は初挑戦となった。現在日本の介護食品の市場は、利用者6500万人で1300億円。1970年代に吉野家を最も利用した団塊世代も、70年代に突入し始めた。多くの市場が縮小する中で、介護関連のマーケットは拡大している。なじみのある吉野家の

## 吉野家社内起業家の挑戦

「誰のため、何のため」の使命感に順ずる心

が、17年2月に高齢者向け「食べさせたい」という一人の塩分を抑えた「吉野家の社員」の強い思いからだ。やさしいごはん 牛丼の具の発売にこぎ着けた。業は個人の強い思いから始まる。社内起業家の介護食として介護施設で提供している。食が細くなっている高齢者でも完食し、おかわりするケースが続出。介護の現場で話題になっている。吉野家ホールディングスの同社にとって、食品メー